



大方あかつき館報

第26号
2017年3月発行

あかつき

文学講座・講演

ずっと上林暁の小説を読んできた

これは、二〇一六年五月二十九日(日) 当館レクチャーホールで開催された上林暁文学館「第一回文学講座」での講師・山本善行さんの講演内容です。
二時間余の講演を、講師の許可を得て、事務局で、割愛、編集し掲載しています。

講師

山本 善行さん (古書 善行堂店主・京都市在住)



やまもと よしゆき

- ・1956年 大阪生まれ。京都銀閣寺近くで、「古書善行堂」を開く。
 - ・夏葉社・上林暁「星を撒いた街」
 - ・「故郷の本箱」の撰者
- 他に、著書・共著多数

山本さんは、はじめに自己紹介もかねて、本との出会いや、古本屋の仕事などについて語られたあと、

上林と出会う

「上林の文章はいい文章で、心に染み渡るような文章」僕は中野重治の言うことはすべて信用していましたから、これは読んでみなあかんと思って、まず新潮文庫、その当時一番手に入りやすかったのが「聖ヨハネ病院にて」で、これを読みました。

最初に読んだ「聖ヨハネ病院にて」は、若いということもあったと思いますけども、話が辛すぎるといかそこまで書くということの意味が僕はまだわかってなかったと思いますよね。さらっと読みましたね。心には残ってて、名作にちがいないと。ただ僕にとって特別な作家にはまだなかった。

大きかったんは、一番上林を読んで体の中に何かが入った、上林としか言いようのないものが

入った瞬間というのはね、これはなんか全然僕は見えないものとか宗教とかにはかわってないんですけどね、この時だけ自分でも不思議なんですけどね。教養文庫から出てる「武蔵野」なんですよ。僕は古本屋に行きながらこの1冊に出会った。武蔵野という地域のことを文人がサラッと散歩して、武蔵野の風景を書いているような作品かと思っていた。でもねそんなじゃあ全然ないんですよ。人間ていうか、人間の心のほんとうにひだつていうかそういうことを書いた作品やと思ったんですよ。大竹新助さんの写真。「花の精」が入っていたというんも大きいんですね。僕は「花の精」が大好きで、それもこれでお出会った。上林がその当時抱えてた悩みであるとか、怒りであるとか、モヤモヤとしたものを割とストレートに書いてあるんですよ。それに僕は反応した。それで「武蔵野」は、自然描写だけじゃないと。ほんとに人間の心自分の気持ち。例えばついバスの女の車掌さんに向かって、上林がちよっときついことを言ってしまった、その後すごい後悔するんですよ。ああいうこと言わんといたらよかったですよね、そういう何か私小説というものの良さっていうか、でも反省して、それと折り合いをつけていく。上林全体に流れてることやと思うんですけども、何かに出会う、何か苦しいことや嬉しいことに出会った時の心の動きですかね、それを実にうまく書いているというのが、僕は上林の大きな魅力やと思うんですけども。そういうのが「武蔵野」というこの1冊に込められてると。僕は人間への興味というのは、自然への興味と比

べても大きかったんじゃないかなと思ってます。

例えば、僕なんかもこれだけ惹かれるということも、不思議な気がする。なんで僕は上林にこんなだけ惹かれて、それこそずっと上林を読み続けても飽きないですよね。何回読んでも飽きない。新たな発見があるっていうのはなんでもかなってというのは、やっぱり人間への興味、人間の持つそういう様々なドラマっていうのが、ぼくは自然の中にあっても際立っているというのか、そういうことがこの中にいっぱい含まれてるので、僕はこれを読んでちよっとびっくりしたんですね。ガラッと変わりました。

これを読んでからは、上林の作品を集めたくなる。それで単行本を集めるようになると。古本屋に毎日行ってるわけですから徐々に集まってきました。それも戦前の本はなかなか出会えないですけども、後期の作品集は殆ど毎日の古本屋で集めましたよね。上林の本を集めるっていう事で言うと、大きな出来事があったて、戦前の本ですよ「薔薇盗人」。その時は初めはね、『流寓記』、岡鹿之助という画家が箱の絵、かわいい鳥の絵を描いた本があるんですけども、その箱だけがレジの所にボンと置いてあったんですね。ぼくは上林の本を集めてましたから、それも戦前の本はなかなか出会えなかったですから、まあ箱だけでもいいかと思っただけですよ。箱を買おうかと。箱を買えば中身もいつかついてくるかもわからないっていうか。なかなかついてきませんけどもね。箱でもほしかった。だから古本屋の店主に「この箱ほしいんですけど」って言ったんですね。そしたら、

店主が「箱なんか買ってどうするねん」って言うて、奥から今入ったとこやという本を持ってきたくれたんですね。その時に、「薔薇盗人」がありました。「田園通信」これ第二の作品ですよ、作品社から出てる、これもありましたよね。「野」というこれもありました。それはもう、ぼくは興奮するんですよ。絶対欲しいと思いました。ただ値段もついてなくて、まだつけてないと言いますよね。何日かして僕はどんなに高かったても買うという気持ちになりましたから、値段の交渉なんか向こうの言いなりです。今だったら、古本屋をやっているの、ちよっとまけてやと言えんですけども、その時はかなり高かったですけども思い切って買った。そういうなかで、上林と出会い始めた。



上林暁の文学碑を巡る

上林という作家―「兄の左手」から

ちやうど睦子さんの『兄の左手』っていうね、あかつき館でね、いま原稿が展示されてますけども、僕にとつて「兄の左手」っていうのも思い出深い1冊なんですよ。その中に出てくる上林がよく泣いていますけども、いろんな人に会ってもう泣かれるのが嫌やっていうて井伏鱒二なんかは書いてましたけど。見舞いに行くのはいいけど

も、すぐ泣いてあれが困ると。困るといのは、嫌やという意味じゃない、だめやというんじゃないんですよ、それで悲しくなる。行くのが悲しくなるっていうようなことやと思いますけども。よく泣いてると。いろんなエピソード、例えば寝たきりで左手しか使えないと、そういうことで読書も書くのも左手でしてる。思うようにいかなくなってくる。だんだん、初めは車いすに乗ろうともするし、いろいろやろうとするけども、だんだんその体もダメになっていくと。その中で、来る人とか妹さんに本を読んでもらいたいと。僕なんかもう今やったらね、駆けつけていくらでも読みたい気持ちがありますけどね。

「兄の左手」に出てくるけども、（故郷に引き上げた上林が）風呂を焚きながら地面に文字を書いては消して、書いては消しているところをお父さんが見て、おかしくなるんじゃないかと、脳の病気になるんじゃないか、精神的に参ってしまうんじゃないかという話が出てきますけどもね。僕がびっくりにしたのはね、それを睦子さんが書いて発表するときに上林が止めたといいますよね。自分ばかり家族のやっぱり困るようなことまで書いてきたのに、例えば都合の悪いことがあったら睦子さんを左手でつねるという事を書いて、これからますます左手がたくましくなるみたいな事を書いてたら、ちよっとそれは書かんといてほしいみたいなね、ことを言うんですね。これは凄いですよ。自分勝手なことですよ。自分はもう好きなことを書いて、でもそういう弱いところも見せて

くれるんですよ。

僕、睦子さんにも一回お会いしたことがあるんですよ。これも夏葉社の『星を撒いた街』『故郷の本箱』が出て、ご報告もかねて、上林の寝たであろう所で睦子さんとお会いして、いろんな思い出を話してもらえたというのは、僕の財産の一つになっていますよね。だから、そういう睦子さんが上林にいろんな本を読んで、その中でもよく覚えてるのは、庄野潤三の「夕べの雲」を読んだと。上林さん喜んでいうような事も書いてありましたよね。それとあと、もう寝たきりになっても、古本が好きやったというのも、僕は古本屋として嬉しいんですよ。そういう中で「古書目録」というのを見て、そこで注文できるわけですよ。それでいろんな全集を注文している。それも凄く感動しましたよね。どんだけ読めるか分からないのに注文すると。それは古本屋としてありがたいことですよ。あと、例えばブルーストなんか読んだりするんですよ。4年かけて「失われた時を求めて」を読んだというの感動しましたよね。本当に1ページ2ページでも、読み続ければ大きな仕事ができる。仕事って言ったら大袈裟ですけどもね、上林が4年かけてブルーストを読んだというのは僕は感動するし、そういうのが文字として残れば、いろんな人に何かが伝わると思うんですよ。そういうエピソードがいっぱい載ってますんで、『兄の左手』っていうのもまだ読んだ事がない人は幸せですよ。これから読めるわけですから。僕は推薦したいと思いますよね。

上林全集を読む

いま『上林晩全集』を読んでいるんですけども、それも去年ぐらいから読み返し始めたんですよ。この話をいただいた時ももう途中でしたけども、毎日読んで、今やっと13巻の途中「紅い部屋」というのを読み終わった。僕はそれを毎日の楽しみにして。忙しい時は1ページしか読めない時もある。そんなことないやろと言われましたけども、大袈裟に言えば1行の時もある。でも0と1は違うっていうか。0やったら進まないけども、1行2行やったらね進んでいくんですよ。だから上林全集も19巻出てますけども、僕は帰ってまたその先を読むのが楽しみ。13巻というとな、主な小説は終わって、あと2回目に倒れられた後、左手でゆっくり書いたような作品に入ってくるんですけども。そういうことも含めてドラマを感じられる。それもずっと読み続けて来たからこそ、感じ取れることやと思うんですよ。

ただねえ、全部の作品を読むっていう事の意味は、やっぱりあるんですよ。一人の作家がいろんなことを考えているんな試みをして、その中で悩んだりするわけですよ。特に上林みたいな作家は特別やと思いますけども、上林は「私小説作家」って呼ばれてますけども、全集読んだらそれがハッキリしますよね。例えば辛い時も嬉しい時も全集読むごとに、我々も感じ取れるじゃないですか。例えば弟が亡くなった時の話なんか、時代順に全集を讀んでいけば、全集全体が一つの自伝的な長編小説やと思うんですね。上林の場合は特にね。

だから、奥さんが精神を病んで入院すると、こ

れはすごい地獄ですよ。そういう事もたとえば全集を読みながら、その辺りに差し掛かるとやっぱりこれからしばらくは、そういう話が続くんですよ。全集を讀んで、みんな奥さんを押さえ無理やりにでも病院に連れて行かなあかなくて話が始めると、これはもう先に讀んでるわけですから、こっちは分かっているわけですよ。これから大変になるのが。それをまた一から僕は読んでいく。まあ辛いですよ。あと何年かはこれで苦しまなあかんと。原稿料もみんなそれで消えてしましますよね。上林はさっき言ったようにお金で苦労するけども。だから改造社という出版社を辞めて独り立ちすると、筆一本で生活するっていう時に、ここに帰ってきますよね。その時が僕は一番苦しかった時やと思いますよ。何年か長いこといて何人にもしないわけですよ。家の仕事も手伝わない。自分で考え込んでしまつてるとも、気持ちには東京にあるけども、なかなか出て行けないと。



紅い花を歌う
“世田谷ピンポンズさん”



たとえばそうやってほんとうに地獄のような日々の事も書いていくと。ほんとで奥さんが亡くなって、飲み屋さんに通って本当にだらしな

活が続きますよね。そういう時も全集を読んでも、いやいやこれやってたらあかんっていうような気持ちになるんですよね、こっちはね。読みながらもうすぐ軽い脳溢血がありますよみたいな、こっちがアドバイスしたくなるような。(笑) 例えばお酒を3年間止めて、もうそろそろいいやろみたいな感じに飲み始めるじゃないですか。そして、こっちとしたらね風呂場で倒れますよというのが出るんですよね。でもそういう、全集全体がひとつのほんとに素晴らしい、ほんとに素晴らしい一人別の人生を生きる。一人の人生でもやっぱ大変なことがありますけども、読むことでもう一人の人生を味わえる。そういう事もあると思うんですよね。

それは上林だけでなく、他の作家もそうだと思うけど、何回も読んでいくとそういう事が思い浮かんでくる。だから僕は全集をお客さんにもそうですけども、自分のこれぞという、自分の気持ちがおほんとに共感できる部分とかもあっていいと思うし、何か一人でも作家を見つけて、出来たらその作家の全集を繰り返し読むと。これはほんとに豊かな時間やと思うんですよね。何ものにも代えがたい、僕自身がそうなんですよ。僕も今でも、さっきも言いましたけれども帰って続きを読む。随筆が待ってるじゃないですか。そうなるまだまだ楽しめる。何か機会があるごとに、また1巻からたぶん読むと思うんですよね。そしたら、こっちも変わってるし、上林の全集は変わらなくずっといてくれるというかね。そういう気持ちで全集をすすめるということですよ。

なぜこれほど上林に魅かれるのか

最後、なぜこれだけ夢中になったのかなあというの、いま少しお話ししたようなことで分かっているとは思いますが、やっぱり僕は上林は高知にとつて宝のような、ほんとうに汲めども汲めども涸れない、大きな井戸のようなそういう存在やと思んですよ。それでこれから日本の宝になっていくと思うんです。僕が好きな作家やからっていうんじゃないに、僕は公平に見て、上林の文学はずっと残っていくもの。これはね上林好きな人は分かってもらえると思いますけども、すごい辛い地獄のような日々のことも、これは経験してる人はいっぱいいてると思うんですよ、世界中にね。でもそれを言葉、文章に表わせる人についてるのは、たまたま上林がそういうことになって、それをやっぱり全身で受け止めたと思うんですよ。それを文章にして残してくれた。これは僕は感謝したいと思いますよ。

すごい日本的な作家やと思いますけども、外国の人たちが研究して、きつとここにもいろんな国の人を訪れてくる日がやってくると、僕は思ってるんですよ。



上林の墓前にて

『第14回上林曉忌俳句大会』 あかつき館で盛大に開催される！

上林曉の命日である8月28日(日)、「第14回上林曉忌俳句大会」が大方あかつき館二階会議室で開かれ、県内外から66名(うち投句62名)の方々の出席がありました。

午前は、曉の生家や蠣瀬川、入野松原などを吟行し、248句が投句されました。午後の大会では、俳誌「蝶」の代表・味元昭次さんから入賞作品の選考や講評をいただき、上林曉大賞1句を始め、中山一志賞、上林曉賞など19句が入賞作品として選ばれました。

● 大会入賞作品 ●

◆ 上林曉大賞

手の届くところにメモや曉忌 宿毛市 谷本忠良

◆ 中山一志賞

んぐんぐと飲む嬰兒よ酔芙蓉 黒潮町 小野みやえ

◆ 上林曉賞

曉忌水脈ひとすじに海を引く 黒潮町 宮川恵子

戦なき七十年の涼しさよ 黒潮町 宮川昭男

曉忌納屋にはりつく袋蜘蛛 四万十市 今城 要

磨り減りし墨の傾きあかつき忌 佐川町 竹崎いと

紫の風誘い合う辣蕪畑 佐川町 廣田昌子

戦陣訓いまも諳んじ生身魂 宿毛市 篠田たけし

労ひの言葉ひとつや夜の秋 四万十市 吉岡鈴代

◆ 入選

母ハル工出て来さうなる柿の家 黒潮町 宮川昭男

虫の秋暁墓所を訪ぬれば
もうすでに秋の陽射しや暁館
ぞんぶんに海を見て来し暁忌
爽かや暁館に波の音
また逢おう辣蕪の花咲く頃に

佳作
佐川町 廣田昌子

勝ち蜘蛛に水吹きかけて幼き子
暁の左手の文字よ墓残暑
秋蟬の声をつくせり暁忌
鯉は寝て水平らなり盆の月
松風も詠りも優し暁忌

四万十市 今城 要
須崎市 西岡栄子
宿毛市 篠田たけし
高知市 岡本みなみ
佐川町 廣田昌子



講師・味元昭次先生の講評



2016年度 主な催しもの

文学館企画展

第21回企画展

「兄の左手となりて」

「病床の兄を支えつづけた妹・睦子」

期間 4 / 2 ~ 6 / 26

特別企画展

「生まれたときから下手くそ」

「安倍夜郎・自伝的漫画展」

期間 7 / 2 ~ 9 / 4

同時開催*「深夜食堂の世界へ」パネル展

第22回企画展

「上林さんの恋」

「真少女・少女・禁酒宣言の女性たち」

期間 9 / 11 ~ 12 / 4

第23回企画展

「ONLにつどう詩人たち」

「詩誌創刊25周年の軌跡をたどる」

期間 12 / 10 ~ (2017) 3 / 26

文学館・顕彰会など

第14回上林暁忌俳句大会

(詳細は、4、5面参照)

上林暁文学講座

(あかつき館レクチャーホール／会議室)

*第一回 5 / 29 (日) 13時半～16時

「ずっと上林暁の小説を読んできた」

講師 山本 善行さん (古書善行堂店主)

*第二回 2 / 5 (日) 14時～16時

「私の文学遍歴」

講師 山本 衛さん (詩誌「ONL」代表)

◇上林暁の作品を読む会 (会議室／14時～16時)

*第13回 6 / 18 (土) 随筆「鏡」など(故郷の本箱)

*第14回 8 / 20 (土) 「弔ひ鳥」(全集7)

*第15回 11 / 19 (土) 「真少女」(全集8)

*第16回 2 / 18 (土) 「尊者」(ツエッペリン飛行船)

◇第27回あかつき賞表彰式

日時 3 / 4 (土) 13時半～15時

会場 あかつき館レクチャーホール

黒潮町立大方・佐賀図書館

□夏休み映画上映会

日時 8 / 6 (土)・7 (日)・8 (月)

場所 あかつき館レクチャーホール

総合センター大ホール (8 / 1のみ)

□秋の名画座「あかつき」

日時 11 / 12 (土) ①10時 ②14時

場所 あかつき館レクチャーホール

作品 「蝸ノ記」「母と暮せば」

□人形劇団ブーク公演『ピンクのドラゴン』

日時 10 / 23 (日) 10時

会場 あかつき館レクチャーホール

□第17回「がえ・イメージ・感想画コンクール」

展示 2 / 10 ~ 2 / 23 (佐賀図書館)

2 / 25 ~ 3 / 12 (大方図書館)

会場 総合センター1Fロビー

あかつき館町民ギャラリー

表彰式

日時 3 / 5 (日) 14時半～15時

会場 あかつき館レクチャーホール



あかつき館＊催し点描

文学館特別企画展

『生まれたときから下手くそ』

～安倍夜郎・自伝的漫画展～

四万十市出身安倍夜郎さんの自伝的漫画「生まれたときから下手くそ」をメインに、「深夜食堂」などの原画をはじめ、中学、高校、大学時代の貴重な作品など、安倍漫画の原点をさぐる資料が多数展示された。

7/2～9/4の期間内に、1200名を超える県内外の皆さんに観覧いただいた。

また8/6（土）には、映画「深夜食堂」上映の後、安倍夜郎さんのトークショーも開催された。



第23回企画展

『ONLにつどう詩人たち』

～詩誌創刊25周年の軌跡をたどる～

幡多の地で生まれた詩誌「ONL（おんる）」その25年の活動の軌跡を、自筆原稿、表紙原画、バックナンバーや個人詩集など同人たちの資料でたどる企画展。

2/5（日）、「第2回文学講座」では、代表の山本衛さんに、「私の文学遍歴」と題して講演していただいた。6名の同人の方々の詩の朗読も行われた。



図書館企画展

『ピンクのドラゴン』

～人形劇団「ブーク」の公演に200名の親子がつどう～

人形劇団「ブーク」による公演『ピンクのドラゴン』が、10月23日（日）午前10時から開催された。

レクチャーホール満席の200名を超える子どもたちや大人たちも、次から次に登場する人形たちが繰り広げる不思議な物語の世界に酔いしれた。



館長日記

～ブログ『クジラのあくび』より～

あたりまえの生活があること

2017.02.03

調査に来た中学生たちに、逆に質問してみた。

「あなたが考える幸せって？」

彼らは異口同音に、こう答えた。

「いまあるあたりまえの生活が、あたりまえに続く（在ること）」

高度経済成長の時代に向かっていった中学時代の私だったら、きっと能天気な答えを口にしていただろう。還暦を過ぎたいまの私なら、「あたりまえの生活」の言葉の持つ意味やその重さが少しは理解できる。

でも、中学生たちの答えには、正直ドキリッとさせられた。不確実で、生きづらい時代、その不安や閉塞感の中に、若者たちの思考もまた閉じ込められているのではあるまいかと…。

『あやに愛しき』を知っていますか 2017.01.31

鎌倉にお住いのTさんから電話がある。

「川崎市のとある映画館で『あやに愛しき』を観て、たちまち上林暁のファンになりました。古書店を巡って何冊か本も見つけ読みました。文学館へも行きたいのですが、遠くて。」

ええっ、1956年に宇野重吉監督の映画第1作として、劇団民芸によって自主制作された『あやに愛（かな）しき』が、今でも上映されているんだあ。名作ではあるが、でも60年近くたった今でも…。映画のこと、小説「聖ヨハネ病院にて」のことなど、熱く語られるTさんの言葉に引き込まれ、30分近くも話し込んでしまった。